

第 18 回フィロロギカ研究集会

2019 年 10 月 12 日 (土) 13:00 より

於 成城大学 7 号館 1 階 7 1 3 教室 (控え室: 7 号館 1 階 7 1 4 教室)

プログラム (各発表時間は質疑応答の時間 [10~15 分程度] を含む)

13:00~13:40

福島正幸「ヒポクラテス『心臓について』における脈管・心室の記述について」
(休憩 5 分)

13:45~14:45

西岡千尋「理論学の三分法における二基準性 (『メタフェシカ』E1, 1026a14)」
(休憩 10 分)

14:55~15:35

大芝芳弘「Propertius, 3.11.57-72 の読みと解釈について」
(休憩 5 分)

15:40~16:00 総会

(休憩 10 分)

16:10~16:50

大塚英樹「obiectum と subiectum」
(休憩 10 分)

17:00~18:00

佐野好則「『縛られたプロメテウス』におけるイーオーの旅路
—地理的問題点に関する再検討—」

18:00~20:00 懇親会

会場: 大学 7 号館地下ラウンジ

会費: 5,000 円 (学生 2,000 円) 程度の予定、当日申込み歓迎

発表要旨

ヒッポクラテス『心臓について』における脈管・心室の記述について

福島正幸

『心臓について(*De corde*)』は70編にも及ぶとされるヒッポクラテス集典の中でも、他の著作とはかなり性格を異にしている。成立時期についても、一般にアリストテレス以後、300-250 BCに成立したものと解され、最も遅い時期に成立したものの一つである。「心臓は形がピラミッドのようで、色は濃い赤色をしている」という文章で始められるこの短い著作は、心臓における解剖学的叙述を中心とする。エロティアヌス、ガレノスにも言及がないものの、とりわけ脈管の記述については『骨の自然性について』『疾病について 第4巻』との親和性が高く、ヒッポクラテス集典における解剖学的記述を理解する上で非常に重要な著作である。しかしながら、古代医学における解剖学的著作に関する横断的な研究は C.R.S. Harris (*The Heart and the Vascular System in Ancient Greek Medicine*, 1973, Oxford)以後ほとんど試みられていない。このような状況は、ヒッポクラテス集典の研究についても当てはまることである。

『心臓について』の近代語による唯一の校訂本は CUF の Duminil 版であり、ここではしばしば大胆な校訂が行われ、これまでの伝統的なテキストとは大きく異なっている。本発表では、Littré 版、Duminil 版におけるテキスト校訂上の諸問題を分析する。とりわけ第4-6章における脈管および心室の記述について、ή μὲν γὰρ ἐν τοῖσι δεξιόσιν ἐπὶ στόμα κέεται ὀμιλέουσα τῇ ἐτέρῃ (「右側の内腔は穴の上であり、左の内腔と連絡しあっている(全集訳)」) および ὥστε οὐ θαῦμα τρηχυτέραν γενέσθαι τὴν λαίην ἐσπνέουσιν ἀκρήτου (「したがって、左の内腔のほうざらざらして、混じり気のない空気を吸い込むことに驚く必要はない(全集訳)」) を取り上げる。全集訳の底本である Littré 版のテキストと異なり、Duminil の校訂本ではそれぞれ、ή μὲν γὰρ ἐν τοῖσι δεξιόσιν ἐπὶ στόμα κεῖται ὀμιλέουσα τῇ ἐτέρῃ φλεβί, ὥστε θαῦμα τρηχυτέραν γενέσθαι τὴν λαίην ἐμπλέην οὖσαν ἀκρήτου と別の校訂が提案されている。しかしながら、Duminil 版において Littré 版に含まれている問題点が解決されたとは言い難い。本発表では、以上のテキスト校訂上の諸問題について、解剖学的な視点を含めて考察し、新たな解釈を提示する。

理論学の三分法における二基準性（『メタフュシカ』E1, 1026a14）

西岡千尋

本発表は『メタフュシカ』E 巻 1 章（1026a14）における論争中の字句をめぐって、本文の難点を捉え直し、克服することを試みる。対立する読み筋の全体像を俯瞰すること、そして近代訂正の側からの批判に応え、新たな写本の読み方を示すことが課題である。

E 巻 1 章において、アリストテレスは自らの形而上学を、理論学の三分法（自然学・数学・第一学）によって学際的に位置づける。本箇所では、自然学の対象が「分離されないが不動ではないもの（ἀχώριστα μὲν ἀλλ' οὐκ ἀκίνητα）」と規定される。19 世紀の注釈者 Schwegler は写本の ἀχώριστα に違和感を表明し、μὲν ἀλλά の対立が要求するのは真逆の(τὰ) χωριστά（分離されるもの）であると注記した。この訂正案は、古代から中世の伝承に全く裏付けられないにもかかわらず、とりわけ英語・独語圏の研究に深く浸透し、現行の校訂版の本文にも採用されている。Christ, Ross, Jaeger, Merlan, Kirwan, Reale, Zekl らが Schwegler に従うが、これに反して Apelt, Cousin, Trépanier, Décarie, A. Mansion, Cleary, Berti らは写本の読みを固持しており、研究史は一致を見ない。

この論争の特徴は、双方に文法・内容上の根拠があり、どちらの読みを採るかによって、三分法の図式全体、すなわち学知に対象化される世界観が一変することである。まず当該箇所即して文法上の争点を確認し、一定の判定を下したのち、対立する立場の代表的な解釈を検討したい。

本箇所についてのこれまでの議論は、μὲν ἀλλά で対比される「分離」と「不動」という二基準を通じて、自然学が数学と第一学のどちらとの関係で捉えられているのか、という点に帰着する。写本通りなら前者、訂正案ならば後者となり、χωριστός の語義もそれに依じて別様となる。本発表で、筆者は"καὶ...καί," "μὲν...δέ," "μὲν...ἀλλά" という三種の小辞の組み合わせの差異性に着目することによって、双方の対比が総合可能であるのみならず、更に写本の読みの妥当性が補強される、ということを検証したい。とはいえ、従来の二つの読み筋の乖離に鑑みて、最後の一押しは解釈問題に委ねられねばならない。

解釈史を画するのは、写本に基づいた Trépanier (1946), A. Mansion (1956) の「抽象」解釈に対して、近代訂正を支持する Merlan (1975) が展開した強力な批判である。最近の写本を支持する論者 (Cleary, Berti) は、Merlan の批判に譲歩しながら、Mansion らに代わる ἀχώριστα の読み方を確立できていない。そこで本論は、以下の二つの点から写本の読みを擁護し、新しい解釈を提案したい。第一に ἀχώριστα を採るとしても、「抽象」説のような単線的な階層性と解する必要はない。そして第二に、χωριστά でなく ἀχώριστα の読みによって、「数学—第一学」に対する「自然学—第一学」という、哲学を規定する別個の学際的ルートを想定できる。この理解は、Merlan が三分法そのものの欠陥と見做した二原理の混同 (ratio essendi/ratio cognoscendi) を捉え直すことを可能にする。

正反対の語義が衝突するこの論争は、「古代プラトニズムとアリストテレスの関係」、また「一つの学問分野としての哲学の成立」という二つの問題に大きな光を投げかける。

Propertius, 3.11.57-72 の読みと解釈について

大芝芳弘

Propertius, 3.11 は「女の脅威を恐れよ」という恋愛詩的なテーマに始まり、最も恐るべき女クレオパトラによるローマへの脅威が語られ、そこからローマを救ったカエサル・アウグストゥスの称賛で締め括られる作品である。その結末部分に当たる 57-72 では、アウグストゥスの業績がローマの歴史的英雄たちの事績と比較され、いわば歴史的展望のもとに置かれる。しかし、この一節は 58, 59 行の読みの問題などの他に、様々な行の入れ替え提案がなされており、意見の一致を見ていない。本発表では、行の入れ替え提案のいくつかを検討し、最も妥当と思われる読みと解釈について考えてみたい。

obiectum と subiectum

大塚英樹

デカルトの未完の作 *Regulae ad directionem ingenii* には、誤って理解されている箇所が無数にある。そのうちのひとつ（第一則解説部のもの¹）を数年前のフィロロギカ集会で指摘した。だがそこには腑に落ちない点がひとつ残っていた。それは *subiectis* という語である。

数行前に *pro diversitate obiectorum* という言葉があるのに、なぜ *obiectis* ではなく *subiectis* がつかわれているのか。その理由が明らかになったので報告したいと思う。またデカルトが *ingenium* という語をどのような意味で用いているかも判明したので（「精神指導の規則」というタイトルからして誤訳である）それも合わせて報告したい。

¹ *idem de scientiis etiam crediderunt, illasque pro diversitate obiectorum ab invicem distinguentes, singulas seorsim et omnibus aliis omissis quaerendas esse sunt arbitrati. In quo sane decepti sunt. Nam quum scientiae omnes nihil aliud sint quam humana sapientia, quae semper una et eadem manet, quantumvis differentibus subiectis applicata, nec maiorem ab illis distinctionem mutuatur, quam solis lumen a rerum, quas illustrat, varietate,*

『縛られたプロメーテウス』におけるイーオーの旅路
—地理的問題点に関する再検討—

佐野好則

『縛られたプロメーテウス』700-741, 786-818における2つのスピーチでプロメーテウスはイーオーがこれから辿るべきスキュティアーからエジプトに至る長大な旅路を予言する。ここで示される旅路には地理的な問題点がいくつか含まれていることが指摘されている。それらは、(1) カウカソス山脈が黒海の東ではなく北に位置づけられていること、(2) カウカソス山脈より発するとされるヒュプリステース川にあたる実際の川を見いだし難いこと、(3) κελαινον φῦλον が住む最果ての地からナイル川の水源地とされるビュブロス山脈に至るとされるアイティオプス川にあたる実際のどの川にあたるのか曖昧であること、等である。これらの問題点について M. Finkelberg, A. J. Podlecki, S. White らの見解を参照しつつ、プロメーテウスが2つのスピーチに分けて示した旅路の2つの区間の比較を含めて新たな観点から再検討することを試みたい。